

# 野に仏・里に仏

大谷 眞

## 第四回目の旅・その二

お互いがお互いの中にお大師さんを見るという関係

1994年7月16日

(後半)

(前回までのあらすじ・1994年4月3日から始めた区切り打ちも既に四回目、二十四番最御岬寺からは、『いよいよ』修行の道場』となる。連日の暑さによる寝不足、少しでも涼しいうちに、と夜の明けける前からの出立が続いている。今日も未明から山道に踏み込み、どうやら道に迷ってしまったらしい。地図にはないトンネルが続けざまに現われ、ますます頭が混乱を始める。)

頭を冷やして考えると、そうか、今、抜けて来たトンネルは、一番最初に見た二つのトンネルの片方だった訳だ。つまり一つのトンネルの出口から、山の中を抜けてもう一方の入り口にたどり着き、そのトンネルをくぐって、

振り出しに帰ってきただけなのだ。それでは、最初に見た標識はどこを指していたのだろうか？もしかして、と左手の崖の草をかき分けると、あった。この崖を下る次の標識を見つけた。最初に見た、木に下げられた標識が、あやふやな位置に取り付けられていたせいで勘違いをしたらしい。やれやれ。

2番目の標識には、良く見ると、

「雨天の場合は道が荒れているため、国道を利用されたし。」

とメモが添えられていた。確かにこの急坂を下るにしても、道は雨水で侵食され、かなり荒れている様子だ。標識には別の誰かが、その後に書き加えたらしいメモもあった。

「通行不能の為、国道を利用された方が良い。」

とある。ところが、これにまたご丁寧にペケを入れて、別の誰かがさらに書き足してある。

「お遍路道は遊歩道にあらず。山行の心得あれば可能なり。」

と、手厳しい。最後の意見に従い、この崖を下った。下りきると道は車道に合流した。ここで山から流れ落ちる岩清水を見つけ、手ぬぐいに浸してはクモの巣だらけの頭と体を拭いた。あとはまた炎天下の車道をひたすら歩いた。

道は佐賀町を過ぎると、左手に海が広がった。すぐに広大な「土佐西南大規模公園」の横を通る。道の脇にあった小高い展望台を見つけ、景色を見ようと登ると、既に先客があった。40歳代半ばの男性と、少し年輩の婦人との二人組だ。二人とも帽子にTシャツのいでたちで、一見、普通の旅行者かと思えた。が、足元におかれたザックに止めた菅笠と、二本の杖ですぐお遍路さんだと分かった。

「こんにちは。」

「こんにちは。暑いですねえ。まあ、一緒に休んでいきませんか？わたしら

は日中は歩かんと、こうして休むようにしとるんです。」

暑い盛りは体力も消耗するし、距離も歩けない、朝と夕方に歩くようにしている、と婦人の方が言われた。それから、

「昨夜はどこにお泊まり？」

と聞かれたので、昨夜の宿の事を話した。同じ歩き遍路なら、案外近くに宿をとられたのかと思い、「そちらはどこにお泊まりでしたか？」と聞くと、

して、休ませてもらいました。」

と私の歩いて来た逆の方向を指差された。はて？という私の顔を見て、

「わたしらは逆打ちをさせてもらってます。」

と婦人。そうか、なるほど、と思う。一般に「順打ち」と言って、八十八力所霊場は順に時計回りで打つわけだが、これに対し、

逆回りで打つことを「逆打ち」と呼ばれている。順に打つ方が標識など整備されて分かりやすいのに対し、「逆打ち」ではその分、何かと苦勞が多い。そ

れだけに得られる功德が大きいと言われている。

またこの「お四国」では、今でもなお、民を救うべくお大師さんは諸国を巡脚しておられる、という信仰がある。したがって、このお大師さんに巡り会うには、逆回りをすれば、必ずいつか巡り合える、という思いがあるのだ。

「ところで都築さんの家は泊まりましたか？」

と、話題は、遍路無料接待所の話になった。都築さんとはこの施設の運営をされておられる方だ。



「ええ、何も良く分からな  
いまま、お世話になりま  
した。」

「わたしらは都築さんのハ  
ウスで働いていたんです  
よ。わたしはね、子供用の  
自転車で、この人は歩い  
てお四国を回っていたん  
ですけど、寒い時節はね、  
そんなに無理しなくても  
いいんじゃないか、って  
言われましてね、それで  
しばらくあの家にお世話  
になって、そこでこの人  
と知り合いましたね。暖  
かくなってから、今度は  
あの家を振り出しに、今  
こうして逆打ちをさせて  
もらってます……。」

男性の方は既に順打ち  
6回、逆打ち1回を歩い  
て、もうこれを最後にし  
ようかと考えています、  
と言つ。そうか、お遍路の  
世界も案外狭いな、と  
思った。婦人の持つ杖も、  
あの長戸庵の熊さんがく  
れたものと言つ。道中、  
彼女達は親子で通してい  
るそうだ。年も離れ過ぎ  
ているし、そのほうが、お  
接待も多いらしい。  
「農家なんかに立ち寄つ  
て、お水を一杯、とお願い  
するでしょう、そうする  
とね、まあまあ、とお茶を

入れてくれましてね。お  
茶をいただいているうち  
に、お風呂でもどうです  
か、なんて言われたりす  
るんですよ。それでお風  
呂から上がると、ご飯が  
用意してあつて、とつく  
りの一本でも付いてた日  
には、後は良かったら泊  
まつていつてくください、  
なんて言われることもあ  
るんですよ。ほんと、あり  
がたいですよ。」

彼女は年金を生活の糧  
とし、そのわずかな資金  
を大切に使つていると言  
う。だから宿は取らず、す  
べて野宿がお堂などで休  
ませてもらうらしい。そ  
れゆえ、彼らにとって、お  
接待はありがたい援助と  
なる。そのうち、話をしな  
がら、私のザックに取り  
付けたカメラが目につい  
たのか、

「何かの取材で回つておら  
れるの？」

と、婦人が聞かれた。お遍  
路を仕事とは考えていな  
いが、旅を記録する意味  
で、常にニコンを持ち歩  
いていた。確かに、普通の  
方たちから見れば目を引  
くのかも知れない。

「そういう訳でもないんで  
すが……。」

鋭いところを付かれ、  
ちよつと後ろめたい気が  
した。婦人はそんな私の  
心を見透かすように、  
「ところで良かった  
ら……。」

と切り出された。  
「晩ごはんの食パン代、2  
00円ほどお接待願えま  
せんか？」

正直、これには少し面食  
らつた。それでも二つ返  
事で、彼女に500円玉  
を差し出した。彼女はこ  
れをありがたそうに受け  
取り、男に促すと、彼は納  
札に名前と住所を書き込  
み、お礼に、と手渡してく  
れた。

「何かに行き詰まつた時、  
お四国を回れば必ず活路  
は見いだせます。寿命は  
変えられませんが、運  
命は必ず変えられますよ。  
『般若心経』を心を込めて  
唱えなさいね。」

しばらくして腰を上げた  
私に、婦人は心を込めて  
アドバイスをしてくれた。  
海から吹き上げてくる風  
に、のんびり時間を過ご  
す彼らに別れを告げ、ま  
た歩き始めた。

歩きながら考えた。婦  
人は年金、彼のほうは、恐  
らく都築さんの農家での



バイトがお遍路の貴重な

資金となっているのだろう。しかし、手持ちの資金はいつまでも当てにはできない。先程、私は二人に対するお接待に、一瞬戸惑いを感じた。お遍路同士のお接待にもためらいがあったが、それより彼女の方からそう望まれた事そのものが、私にはまだ引つ掛かっていた。例の熊さんの「警察騒ぎ」(その真偽はともかく)と、どこか共通するように思えたのだ。

堂々と人に援助を求めることが、すべてをお大

師さんにおまかせする心

情と、どこか相反するようにも思える。しかし、現に彼女たちのお遍路を可能とするのは人の情け、四国の人達のお大師さんへの厚い信仰あつてのこと。人々がお遍路さんを通してお大師さんを見るのなら、一人もまた、お大師さんなのだ。だから、信仰が彼女たちのお遍路を可能としているのはまぎれもない事実だ。しかし、与えられて感謝すること、援助を自ら求めることとは、少し意味が違う

ような気がする。そこに

引つ掛かっていた。

もしかして、と別の角度からも考えて見る。お遍路という行為を通して、何らかの願いが成就することを祈る人は多いはずだ。内容、そしてその大小を問わずに。同じように、彼女もまたこの私に、ささやかなゆづげにみあう、わずかばかりのパン代を望んだのだとしたら? 一人のお遍路を通して、彼女は私の中にお大師さんを見たのだとしたら?

私にとつても、今までお接待(金銭的なもの)だけでは(ない)を受けた方

は、ある意味でお大師さんだった。お遍路をする人も、そのお遍路を見守る人も、互いが互いの中にお大師さんを見る・・・、それらの貴重な体験を通じて、人は人の性が「善」である確信を一つ一つ積み上げていくのかも知れない。与える立場、与えられる立場それぞれにおいて、自分の持つ自我やおごり、虚栄心を捨て去ることで、もっと自分を、正直に淡々と見つめることが出来るのでは・・・。そう気がついた時、先程一瞬でも彼女に喜捨することをためらった自分が無性に恥かしく思えた。人

によって評価の別れる例の熊さんの件も、本人そのものを論じるより、むしろ彼に接するおのれ自身を論ずるべきなのだ。四国を歩くことで、人は自分の中の何かを、変えたいと願う。足の痛みと、人の情けに泣いて、それぞれの人がそれぞれの何かを得ようと願う。それは熊さんと同じだろう。共に切磋琢磨する中にあって、互いが互いに手を合わせること、もっと深い何か、私たちの

前に姿を見せてくれるのではないだろうか？あの熊さんがめざしていたこと、熊さんが捨てきれなかったこと、清濁あわせて、自分の身と置き換えれば、もっと彼を、自分自身を理解できたのでは無いただろうか・・・。

うだるような暑さの中、途中の公衆電話から、今日の宿「ビックマリ」に予約を入れた。お遍路のための宿というより、海を楽しみにきた客のためのそれらしい。この宿では、クーラーは一晩中利用できそうだ。

7月17日

晴れのち曇り、夜に雨  
朝起きると体がぐったりと疲れている。クーラーのかけっぱなしのせいでだろうか。部屋で簡単に朝食を済ませ、準備を終えると、まだ真つ暗な中を出発した。時刻は4時を回った所だ。

お遍路の地図では海岸沿いの道があるとのことだったが、なにぶん時間が早く、標識を見落としてしまった。しかたなく国道を進んだ。中村市内

に入る手前で、「四国の道」の休憩所を見つけた。中をうかがうと、一人のお遍路さんが休んでいるところだった。やはり私と同じく、40歳代半ばの男性である。目が合って、おはようございます、と声をかけた。

「おはようございます。お歩きですか？」

「ええ、そちらも？」

「聞くともまだ『逆打ち』だと言う。徹底した野宿のお遍路らしく、着ている白衣もほとんどネズミ色となり、おまけに所々つぎもあてられていた。ずいぶん長く回られている様子だ。」

「このところの暑さには本当に参りました。夜も寝苦しくて、朝方やつと眠れるだけです。ずっと寝不足で体にこたえます。」

それに対し、まがりなりにもクーラーのある部屋で、ゆっくり寝られる自分が後ろめたく思えた。しかしながら、昨日の二人といい、今朝の彼といい、よほどの信心のあつてのことか、とたずねると、

「いやいや、私とて深い信

心あつての遍路ではあり  
ません。ただ人間だれし  
も歩きたくなる時があ  
りますから・・・。」

それが彼にとって「お四  
国」だった、と言う。ただ、  
信心深くはない、と言わ  
れても、彼の白衣を見れ  
ば、なまはんかでは無い  
事は確かだ。すべてを任  
せ、身を捨ててこそ浮か  
ぶ瀬もあれ、と言うこと  
か。どこかいつも、逃げ  
道を作っている自分を、  
ふと情けなく思った。

「ユルユルで、逆打ちとな  
れば、もうお大師さん  
に会われましたか？」  
「いやいや、まだです  
よ。もつとも、お会いし  
てもその時には分から  
ないでしょうけ  
ど・・・。」

お遍路をした人は、  
後になって、そうか、あ  
の人が私にとつてのお大  
師さんだったのか、と気  
づくことがあるそうだ。  
それらのお大師さんは、  
何もお坊さんの身なりを  
されているわけではない。  
道々での何げない援助や  
出会いが、後々大きな意  
味を持ち始める事がある。  
そんな時、もしやあのお  
方は、と思えるのは、この

お遍路の世界特有のロマ  
ンなのかも知れない：。  
彼と互いに旅の無事を祈  
り、また歩き始めた。

この先、道は中村市へ  
と入り、四万十川を渡つ  
た。さすがに大きくて、水  
の底まで見通せた。2匹  
の鯉が悠々と泳いでいる  
姿を、暑さにくたびれた  
自分に重ねて眺めた。橋  
を渡り、今度は四万十川

子どもたちが川遊びをす  
るのをうらやましく眺め  
つつさらに歩く。

今日は野宿を予定して  
いた。この先、海岸沿いを  
歩く事が多いと思えるし、  
その分テントを張るのに  
は困らないだろう。その  
うち「久万地海水浴場」  
と、脇道に向けて案内を  
見つけ、迷わずこの道に  
それた。集落を抜けると



と、もう一つの川に挟ま  
れた細長い中洲を歩いた。  
すでに太陽は真上にあり、  
遮るものは何ひとつ無い。  
これが延々と続き、ほと  
ほとまいった。

伊豆田坂トンネルを抜  
けると、道は中村市から  
土佐清水市となった。途  
中、番外霊場「真念庵」に  
立ち寄り一服をした後、

松林に出た。テニス場や  
シャワー設備などもあり、  
コンクリートの防波堤の  
切れ目から砂浜に出た。  
日曜日とあって、数組の  
家族がのんびり波と戯れ  
ている。ここなら遠慮な  
くテントが張れそうだ。  
夕刻も近くなってから家  
族連れが帰ると、ザック  
からテントを出して砂浜

に広げた。今回も重量を考慮し、防水のフライシートは持参していない。暗くなる前に、と慌ただしく夕食をとり、日記を書いた。あとは寝るだけだ。空はどんよりとして蒸し暑い。せめて風が出てくれればありがたいのだが。

7月18日 曇り時々雨

昨夜は最低だった。テントに入ってから、砂が熱を含み、とても寝るどころではない。海岸だといつのに風が全く無く、まさにサウナのようだ。横になっているだけでじっとり汗がにじんでくる。少し離れたテニスコートの夜間照明もそのうち消え、辺りは真っ暗になった。テントのネット越しの空には、星ひとつ見えない。

午後9時半を過ぎたころ、耐え切れなくなった。これでは寝るところか、拷問に近い。とりあえず砂浜の入り口にあったシャワーを借り、ついでに汗にまみれたシャツもぎざぎぶと洗った。後はパンパンと水を切っただけで、そのまま着た。すっ

として、まさに生き返った。

テントに戻り、撤収を始める。汗と砂だらけのテントをたたんでしまおう、後はもうここにいる意味も無くなってしまった。時計はまだ午後11時を回ったばかりだ。しかしこの蒸し暑さ、雨の予感がする。だとしたら、テントを撤収して正解だったかも知れない。ここから足摺岬の第三十八番金剛福寺まで、まだ24キロあまりあった。とりあえず、行けるところまで行こう、と歩き出した。いつもなら歩き始めて2、3時間で夜が明けるのに、今日はまだ夜が始まったばかりである。徹夜で歩いて、どの辺りまで歩けるのだろう。

2時間もたったころ、とうとうパラパラと雨が降り始めた。少しぐらいたら濡れたほうが涼しくて良い、と高をくくっていたら、そのうちぎざぎざと本降りとなった。あわてて駆け出すと、ちょうどバス停の待合所があり、これ幸いと転がり込んだ。中はベンチもあり、そこそこ広い。さす

がに疲れを感じ始め、ここで仮眠をとることにした。雨のためか、蚊もいない。すぐに眠りに落ちてしまった。

通り過ぎる車の音に我に返った。まだ辺りは暗い。時計を見ると午前3時半。2時間ほど眠ったようだ。ベンチに敷いていたシートが、汗でベツベツ濡れていた。雨も止んだようなので、また歩きだした。

標識に沿って国道からいったん民家の間に入り、海岸を経て山に入った。まだ夜は明けず、さすがに真っ暗である。ヘッドランプを頼りに山道を進むと、やがて空も白み始め、そのうち旧道らしき車道に出た。この道をさらに行くと足摺岬への県道に合流した。

脇道で少し休んだ後、左手に海を見ながら歩く。考えてみたら、昨夜からるくに食べていない。朝も抜きで歩き続けているせいか、足元が少しふらついた。食料を仕入れようと思いつきながら、行けども行けども、店らしきものはなく、あっても時間

が早すぎるのか閉まっていた。

道はいつの間にか海からの高度を上げ、細くなったたり、太くなったりを繰り返した。そのうち両脇の木々がうつそうと繁り始め、しばらく行くと第三十八番金剛福寺の前に出た。室戸岬のように、さらに国道から山に入るのかと思っていたので、随分儲けた気がした。

お参りを済ませ、目の前の国民宿舎で宿泊の手続きをとった。別料金を払い、すぐに部屋を使用させてもらうことにした。

好意的にシャワーもお借りし、後は上下全部洗濯機にぶち込む。その間に近くの食堂に向き、簡単に食事を取った。

宿に戻り、早速布団を敷き、夕刻5時まで熟睡した。6時に夕食。風呂に入ってから日記をつけた。明日はまた3時に宿を出て、土佐清水港から朝11時半のフェリーで帰阪の予定である。

しかし今回の旅は疲れた。夏の遍路がこれほど過酷とは思わなかった。次は少し暑さが和らいだころ再開せねばなるま

い……。クーラーのきいたこの部屋に身を横たえて、今夜もまた、いずこかの空の下で、野宿遍路を続けている人々を思った。身を捨ててこそ浮かぶ瀬もあれ、か……。考えながら、やがてまた、深い眠りに落ちていった。

